

ペルー、ベンティーヤ遺跡とナスカの編年

山本睦 (山形大学)
坂井正人 (山形大学)
ホルヘ・オラーノ (山形大学)
松本雄一 (山形大学)
門叶冬樹 (山形大学)

ペルー南海岸のインヘニオ谷南岸に位置するベンティーヤ遺跡は、同谷で最大規模を誇るナスカ期（紀元前後・紀元後 750 年）の遺跡である（表 1）。先行研究によれば、ナスカにおける居住・行政・祭祀センターとされ、土器編年のナスカ 3 期と 5 期にインヘニオ谷の人口が増大した際に、中心的役割をはたしたと考えられてきた[Silverman 2002]。

しかし、ナスカにおける山形大学考古学調査の一環として、実施された 2015～2106 年のベンティーヤ遺跡発掘調査では、遺跡の特性について、先行研究とは異なる新たな知見がえられた。

発掘調査の結果、ベンティーヤ遺跡では大きく 3 つの建設フェイズがあることが確認されている。

フェイズ 1 は、石造建造物に対応し、主としてナスカ 1 期の土器を共伴する。ナスカ 1 期は、パラカスとナスカの移行期およびナスカ早期と考えられる時期である。

また、フェイズ 2 と 3 は、アドベ建造物に対応しており、ナスカ 3 期と 5 期の土器の出土が確認される。ナスカ 3 期と 5 期は、それぞれナスカ前期と中期に比定される。

しかし、ここで注意しなければならないのは、ナスカ研究においては現在でも精緻な編年が組み立てられていない点である。とくに、土器編年はコンテキストの不明な土器を用いたセリエーションに依拠しており、各様式の序列、継続期間、重複関係については不明な点が多い。そのため、土器様式の順序は層序にもとづくという言及がある一方で、様式の差は時期差だけではなく、地域差を示すという指摘もあるのが、現状である[Hecht 2013, Vaughn et.al 2014]。

そこで、本発表では、ベンティーヤ遺跡における発掘成果、とくに建設プロセスと出土土器との関連について、放射性炭素年代の測定結果をふまえて総括する。そして、ベンティーヤおよびナスカの編年について検討していく。

Hecht, N

2013 A Relative Sequence of Nasca Style Pottery from Palpa, Peru. VVB Laufersweiler, Giessen.

Silverman, H.

2002 Ancient Nasca Settlement and Society. University of Iowa Press, Iowa.

Vaughn, K. J., J. W. Eerkens, C. Lipo, S. Sakai and K. Schreiber

2014 It's about Time? Testing the Dawson ceramic seriation using luminescence dating, South Nasca region, Peru. Latin American Antiquity 25(4): 449-461.

時期名	年代	土器編年
パラカス後期	紀元前400年－紀元前200年	オクカへ 8, 9
ナスカ早期/移行期	紀元前200年－紀元後1年	オクカへ10, ナスカ1
ナスカ前期	紀元後1年－紀元後450年	ナスカ2, 3, 4
ナスカ中期	紀元後450年－紀元後550年	ナスカ5
ナスカ後期	紀元後550年－紀元後750年	ナスカ6, 7

表 1 : アメリカ隊によるナスカ地域の編年

ペルー南海岸におけるミドルホライズンの様相

松本雄一（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（山形大学）

坂井正人（山形大学）

ミドルホライズン（紀元後 600-1000 年）は、中央アンデスの広い範囲が高地に出現したワリ帝国の影響下にあったとされる時期と定義され、ワリ帝国が出現したアヤクチャ以外の地域ではワリ帝国の支配戦略と各地のローカルな政体との関係性が大きな研究課題となっている。本調査の対象であるペルー南海岸においては、ナスカ文化の衰退と対応してワリ帝国の影響が拡大したとされており、同時に大きな社会変化が起こったと想定されている。現状は、ドイツ隊によるパルパ河谷、および合衆国の研究者によるナスカ河谷以南での踏査と発掘によって南海岸におけるワリ帝国の影響のイメージが形成されているとよい。両者とも乾燥化の進行による遺跡数の減少を指摘しており、南海岸が山地のワリ文化の影響下に入ったという点では一致しているが、その地域的な実態に関しては異なる解釈を提示している。パルパ河谷においては、セトルメントパターン、古環境、DNA などのデータから、中・上流域への人口移動が論じられる一方で、ナスカ河谷以南ではセトルメントパターンの変化に加えて、他地域からの移住を示唆する同位体データ、ワリ帝国様式の建築の存在、物質文化に見られるローカルな要素の継続から、山地社会を通じたコントロール、海岸のローカルな社会側からの抵抗が想定されている。

発表者たちが 2013 年から行っているインヘニオ谷における踏査で得られた成果は、これまで南海岸で得られたデータを統合する視点を提示するものである。同河谷の調査では、乾燥化が進んだためにその重要性が減少したとみなされてきた下流域に、ミドルホライズンの遺跡が集中し、きわめて重要な遺跡が位置していることが明らかとなった。特に、1950 年代の合衆国考古学者の調査以降これまでほとんど知られておらず、その現存が疑問視されてきたトレス・パロス遺跡 (Tres Palos) を再確認したことは、きわめて重要である。発表者たちの調査によって、トレス・パロス遺跡は、ワリ帝国の行政的・宗教的建築のテンプレートに忠実であり、その周囲には、ミドルホライズンの居住の痕跡と墓域が例外的に集中していることが明らかとなった。おそらく同遺跡は南海岸における最大規模のワリ帝国の行政センターであると考えられる。このようなデータは、インヘニオ河谷の下流域が、ワリ帝国との関連で非常に重要であり、同地域とパルパ河谷、ナスカ河谷の遺跡との関係を包括的に検討するカギであることを示唆している。将来的な更なる発掘調査によって、これまで河谷ごとに提示されてきたデータを統合して先行研究における解釈を再検討し、ワリ帝国の影響の南海岸における実態を再考することが可能となるであろう。

ナスカ地域における先スペイン期の食資源利用調査

瀧上舞 (山形大学)

坂井正人 (山形大学)

ホルヘ・オラーノ (山形大学)

米田穰 (東京大学)

ペルー南部海岸のナスカ地域では、その地域の大部分に乾燥した砂漠環境が広がっており、僅かに河川流域周辺のみ農耕牧畜が可能な環境となっている。この地域では、パラカス期、ナスカ期、ワリ期、イカ期、イカーインカ期にわたる社会の変遷が確認されている。この限られた環境でどのような資源戦略がとられたのかを明らかにすることは、ナスカ社会の発展を理解するための重要な情報の一つとなる。特にナスカ台地を挟んで南北の河川流域における資源戦略の差異や、海岸と内陸、また内陸間での資源流通について注目し、調査を行っている。

本研究ではヒト遺存体及び動物遺存体を用いた同位体分析による食性推定から、先スペイン期の食資源利用を考察している。ナスカ地域での食資源利用調査には、三つの考察段階がある：

1. ナスカ地域（台地を挟む南北河川流域）での資源戦略、食性の南北差
2. ナスカ南北地域それぞれでの資源戦略、食性の時代差、各河川流域内での食性の地域差
3. 各遺跡での資源戦略、同一遺跡内での食性の時代差、階級差

先行研究の同位体分析は、ナスカ南部地域に集中しており、いずれも 3 の視点でナスカ期とワリ期のデータが報告されている。本研究では 1 と 2 までを視野にいたした資源利用を検証すべく、データが不足している時代・地域を重点的に調査している。現在はデータを収集中であり、まだ 1 と 2 について、簡単な考察行う程度にとどまっている。

これまでの調査ではナスカ南部地域のイカ期からインカ期のデータを、チャウチャーヤ遺跡のミイラの毛髪から入手した。また、ナスカ北部地域の調査として、ベンティヤーヤ遺跡の出土試料からナスカ期のデータを入手した。さらに、分析点数は少ないものの、北部地域の墓地遺跡から、ランダムにサンプルを選び、ワリ期からインカ期までの食性を入手している。本発表では、現在のデータから推論される 1 と 2 の視点でのナスカ地域の食性について報告する。また、今年の夏期調査では、インヘニオ谷のワリ期の墓地遺跡と、イカ期の墓から試料を入手しており、今後の研究の見通しについても触れる。

ワリ期の埋葬形態について ペルー北部高地カハマルカ地方の事例

渡部森哉（南山大学）

中央アンデスのワリ期（700-1000CE）については、ワリ帝国が台頭した時代と説明される。帝国は存在しなかった、あるいはワリは帝国ではなかったと主張する研究者もいるが、この時代に地域間交流が活発になったという点については、ほとんどの研究者が同意している。地域間交流を示す物質文化としては、例えば他地域起源の様式の土器や、黒曜石製石器などが挙げられる。またペルー北部高地カハマルカ地方では、この時期に他地域に起源がある土器が出土するほか、在地のカハマルカ様式土器のタイプ数が増加する。つまり外部の要素が入ってくるだけでなく、それに平行して在地文化の多様性が増加したといえる。

本発表では、ペルー北部高地を事例として、埋葬形態に注目しワリ期の相互交流について考察することを目的とする。ワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオでは、半地下式石室墓、土坑墓、壁下埋葬、甕棺墓などが確認されている。同時代のパレドネスではチュルパと呼ばれる塔状墳墓が検出されている。さらにエル・パラシオ遺跡付近ではベンタニーリャスと呼ばれる窓状岩窟墓があり、中期ホライズンのものと想定されている。通常、ある地域のより古い時代の文化要素が他地域で認められれば、片方から他方への文化要素の移動、伝播、影響などと説明される。しかしこうした一連の埋葬形態は、その起源がどこにあるのか不明なものが多い。またチュルパやベンタニーリャスなどの埋葬形態は、首都ワリ遺跡やその周辺遺跡では認められない。さらに遺物の共伴関係を見てみると、特定の土器タイプと特定の埋葬形態の間に対応関係は認められない。データから、土器と埋葬形態はセットで導入されたわけではないということ、各地で文化要素の取捨選択が行われたこと、中央から地方へ文化要素が伝わったわけではないことなどが指摘できる。最後にこうした特徴がワリの支配体制とどのような関係があるかを、インカ帝国と比較しながら考察する。

ペルー北海岸クルス・ベルデ遺跡における発掘調査概報

荘司一步 (総合研究大学院大学)

ヴァネッサ・ラ・ロサ(トゥルヒーヨ大学)

ペルー中央海岸では建築的特徴を共有する巨大な公共建造物の建設が形成期早期に開始されることがわかっており、これまでに多くの注目を集めてきた。その一方で、北海岸では、形成期早期の公共建造物に関する報告例は非常に限られており、当該期における公共建造物の空白地帯となってきた。そこで発表者は、北海岸における公共建造物の出現と形成過程を明らかにすることを目的に、クルス・ベルデ遺跡のマウンドを対象に 2 シーズンにわたる発掘調査を実施した。本発表では、これらの調査成果を示し、紀元前 4000 年に始まるクルス・ベルデ遺跡のマウンド建設過程を明らかにする。

クルス・ベルデ遺跡は、ラ・リベルタ州のチカマ川下流域沿岸部にあり、現在の海岸線から約 200m、チカマ川河口から北に約 6 km の低い海岸段丘上に立地している。複数のマウンドで構成されており、このうち、A 地区に位置するマウンドの調査は、先土器時代の公共建造物の存在を明らかにした。これらの建設過程は CV-I 期と CV-II 期の大きく 2 つに分けられる。CV-I 期では、動植物遺存体などの食糧残滓の廃棄行為とそこに埋め込まれた埋葬、床面が幾層にも積み重なって検出されており、これらの活動の堆積によって少しずつマウンドが形成されていく様子が明らかになった。一方の CV-II 期では、このマウンドの上面に丸石を建築材とした基壇と部屋状構造物の建築が開始される。この部屋状構造物の内部では、何度も床面が張り替えられていることから、建築の改変が繰り返し行われたことがわかる。このように、CV-I 期から CV-II 期にかけて、マウンドの性格と建設過程は大きく変化する。本発表では、CV-I 期の廃棄行為と埋葬行為の反復的な実践がマウンドのモニュメンタリティを創出し、CV-II 期の公共建造物の建設の契機となった可能性を議論する。

ハンカオ遺跡発掘調査ーアンデス文明形成期編年の精緻化に向けてー

鶴見英成 (東京大学)

リセ・アクーニャ (カトリカ大学)

アンデス文明形成期 (前 3000～前 1 年) の編年は、ペルー各地の研究成果の統合が進められ、大まかに形成期早期 (先土器期後期)・前期・中期・後期・末期の 5 期に区分する見解が、国際的にほぼ共有されている。ただし、神殿での活動が恒常的であったのかどうか、地域を越えて共時的に物質文化が変化したのかどうかなど、社会動態の議論に関わるさまざまな問いが、暦年代をふまえて検証すべき今後の課題となっている。編年研究を精緻化させる上で、長期間の遺構群が積層した地点を発掘し、年代測定試料を層位に従って採取することが有効である。形成期研究の主対象である大規模公共建造物すなわち「神殿」は、反復的に建築を更新した痕跡が広く見られるため、年代測定結果の層位的な検証に適している。ただし遺跡ごとに創始・放棄時期が多様であることももちろん、ひとつの神殿を停止させて近隣に別のものを創設する「移転」の事例も多く、単一の地点に形成期の全期間の遺構が積層したマウンドの事例は意外と少ない。1960 年代に東京大学が北部山地ワヌコ盆地のコトシュ遺跡で発掘した KT マウンドは、早期～末期が積層した唯一の確かな事例であり、しかも続く地方発展期の遺構まで加わるため、編年研究に理想的な層序を示す。発表申請者はコトシュ遺跡を再調査して編年の検証を進めるとともに、第 2 の事例という可能性のある、同じワヌコ盆地のハンカオ遺跡に注目した。ハンカオは 2001 年に発見されたマウンドで、コトシュと同じく形成期前期～地方発展期という 5 時期の土器片が散布している。幹線道路で大きく分断され、宅地化の進んだ劣悪な保存状況にあるが、発掘、および分断面を懸垂下降して遺物と炭化物を採取するなど、残存部のデータ収集に努めた。その結果コトシュと同様、早期の大規模建築を中核としている可能性が濃厚となった。年代測定は進行中であるが、遺構・遺物の知見を中心に概要を発表する。

パコパンパ遺跡の考古動物相：多様性と類似性を評価する

鵜澤和宏（東亜大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（サン・マルコス大学）

11 期に渡る調査をへて、パコパンパ遺跡から出土した哺乳動物の分類群がほぼ特定された。同定された哺乳動物は、有袋類1種、げっ歯類6種、海獣類2種、偶蹄類2種、食肉類1種、霊長類2種の合計14種であった。海生動物から森林に生息する中小の野生動物、家畜までを含む多様な動物たちは、神殿でおこなわれた活動に応じて集められたと考えられる。それぞれの種が異なる目的のもとに利用されたことは、出土状況の違いからもうかがわれる。出土動物の生態的多様性は、神殿でおこなわれた諸活動の多様性と対応していると考えてよいだろう。つまり、遺跡出土動物相に含まれる種数、その構成比は、遺跡が立地する生態系の制約を前提としつつ、同時に、人間活動の特徴を示すデータとして扱うことができるだろう。

本調査速報では、考古動物相を人々の神殿における活動の多様性、類似性を評価する指標として用い、パコパンパ遺跡での動物利用を検討する。具体的には、パコパンパI期からII期にいたる動物相の変化を明らかにし、同時期他地域の形成期神殿との比較を試みる。従来から、種構成の比較は動物考古学におけるもっとも基本的な分析として行われているが、単に出土した種のリスト、あるいはその構成比をならべて比較しても、その相違をどう解釈するかは分析者の視点に左右される懸念があった。本報告では、複数のサンプルに含まれる種の多様性、類似性を評価するための指標として、群集生態学で用いられるようになった複数の尺度を適用し、考古資料への応用をはかる。

なお、海岸、山地、森林に大別されるペルーの自然環境は、高度によっても劇的に変化し、異なる生態系が隣接するという特徴をもつ。おなじ山地を例にとっても、北部高地と南部高地では利用できる動物が異なっている。遺跡間比較には、それぞれの遺跡周辺で利用できる動物相の違いをどのように考慮するかが問題となる。そこで、近年、進展を見せているペルーの生物相調査の知見を利用し、立地条件の違いによる動物種の相違を考慮に入れた、考古動物相の多様性と類似性の比較を試みる。

ペルー北部ネペーニャ市周辺地域における形成期神殿の後背地調査

芝田幸一郎 (法政大学)

宮野元太郎 (大阪観光大学)

アンデス形成期の研究においては、神殿遺跡が主な調査対象とされ、とりわけ海岸地方における各種居住地・耕作地・採掘地・墓地などを含む「後背地」の調査研究は断片的なものにとどまってきた。形成期の社会を考察する際に、神殿が有効な切り口の1つであることに疑念の余地はないが、後背地の分析を加えることでより多面的な社会像を得られる見込みである。

本発表では2017年8月にペルー北部ネペーニャ河谷下流域にて実施した調査とその成果の概要を報告する。昨年度の南岸ベータ・コロラダ地区における試験的調査の成功を踏まえて、ネペーニャ市周辺の北岸、谷底平野、南岸を縦断し6km四方をカバーする形で調査を実施した。我々の調査が、ネペーニャ河谷を含むペルー北部・中部海岸で各国の調査団がこれまで行ってきた踏査と大きく異なる点は、1)自ら実施した発掘調査によって既に形成期の土器編年を得ていること、および、2)ドローンの活用である。

太平洋に面した幾つかの河谷下流部では、セトルメントパターン調査の一部として、形成期の後背地遺跡が登録・分析されることはある。しかし発掘調査に基づく地域土器編年を確立せずして土器表採を行うことが多く、そもそも各遺跡の時期比定の精度に問題があることは否めない。実際、ネペーニャ河谷下流域における我々の調査では、多くの遺跡にて先行研究による時期比定を覆す結果が得られた。一方、ドローンによる航空三次元測量は、後背地遺跡の所在地を絞り込む際に、他に代えがたい力を発揮した。広大な平原の微細な地形の起伏を捉えられるため、踏査でも衛星写真でも見えない砂に埋れた構造物群が浮かび上がった。

本発表では、これまで発表者が発掘を行ってきたワカ・パルティエダ等の神殿遺跡、北米の調査団が発掘を進めているカイラン等同時代の遺跡、そして今回の調査で得られた後背地に関するデータを往復しながら、神殿と後背地の関係についても考察し、今後の調査研究の展望を示す。

アンデス文明形成期の建築活動にみる水利用と災害の記憶

宮野元太郎（大阪観光大学）

芝田幸一郎（法政大学）

人々にとって水は生存のために必要不可欠なものであると同時に脅威であり続ける。古代アンデスの人々は日々の生活や耕作のためにいかに河川を利用しつつ、時折起きる異常気象による氾濫に対応したのか。はたして災害の記憶は後の建築計画に反映されたのか。本発表では、ペルー北部ネペーニャ谷下流域における形成期神殿とその後背地に関する調査から、建築活動と水の関係、さらに土地利用と災害の記憶について、最新の観察と考察を報告する。

本プロジェクトでは、平成28、29年の二期一ヶ月に渡り、ペルー北部ネペーニャ谷下流域に点在する遺跡およびその周辺の地形について、ドローン空撮及び光波測量を踏査と並行して行なった。対象は研究代表者が過去に発掘したワカ・パルティエダ遺跡やセロ・ブランコ遺跡を含む形成期神殿遺跡とその後背地であるが、比較対象として付近の別時期の遺跡についても同様の調査を行なった。現在、写真および測量データより3Dモデルを生成し、GIS上において様々な角度から詳細な空間分析にあたっている。

昨年の予備調査段階から、建築活動と土地利用について、とくに河川の利用や水害の影響が建築計画段階からある程度意識されていた可能性を示す遺跡分布が観察された。神殿とその後背地には、比較的狭い範囲内に、水との関係性という意味で多様な環境がある。すなわち、川床から河岸段丘、そして丘陵地と、それぞれ水利用の容易さと氾濫時の影響の大きさが異なっている。そしてそれぞれの環境には異なるプログラムの建築が分布しており、建築活動に水が影響していた可能性が考えられた。さらに本年度の調査では、より多くの遺跡を測量すると同時に、調査地を含むペルー北部がエルニーニョの影響による大規模な水害を被った直後に調査が実施されたこともあり、実際の河川の氾濫や大量の雨水の流入など水害の影響についても観察された。

今後、古代アンデスの建築活動と水の関係、そしてそこに災害の記憶が反映された可能性について、形成期からさらに通時的に探っていく。

都市部のパブリック考古学
—ペルー中央海岸ワカ・メルガレホ遺跡のパブリック考古学調査速報
サウセド・ダニエル (立命館大学)

El Proyecto de Arqueología Pública “Huacas de La Molina” se inició el año 2015 con el objetivo de estudiar los procesos sociales y culturales de los sitios arqueológicos monumentales ubicados en el distrito de La Molina (Lima, Perú) desde su creación hasta el presente. Para lograr este objetivo, el sitio arqueológico Huaca Melgarejo fue elegido como caso de estudio, dado que tiene evidencias de uso de diversos periodos desde su construcción durante el Periodo Intermedio Temprano hasta el presente. Actualmente este sitio es considerado Patrimonio Arqueológico y forma parte de un parque urbano bajo la administración del Ministerio de Cultura del Perú y de la Municipalidad Distrital de La Molina. Desde este año, este sitio forma parte del programa Puerto Cultura de dicho ministerio, el cual busca diversificar y aumentar el uso de varios sitios históricos y arqueológicos en el Perú mediante actividades culturales, educativas y de rehabilitación urbana.

El presente proyecto tiene dos componentes. El primero es el de un Proyecto de Investigación Arqueológica, y el segundo es el de un Proyecto de Arqueología Pública. Para el primer componente, durante las temporadas del año 2016 y 2017, hemos realizado una recopilación de información de archivos, fotografías aéreas, antiguos planos e informes para darnos una idea de la evolución del sitio hasta el presente. Como resultado de esta investigación, ha sido posible establecer de manera general tanto la temporalidad del sitio como su filiación cultural. Esta información será luego afinada mediante excavaciones arqueológicas que se realizarán en futuras temporadas en el sitio. Para el segundo componente, hemos realizado desde el 2015 un mapeo de actores clave en la administración y uso del sitio. Mediante observación participante y entrevistas no estructuradas, nos ha sido posible definir los intereses sobre el sitio y establecer algunos acuerdos para poder estudiarlo y conservarlo. Si bien hemos logrado conseguir aliados importantes para continuar nuestro estudio, también han surgido diversos problemas a futuro.

En la esta ponencia mostraremos los resultados preliminares de ambos componentes empezando por la cronología general del sitio, su filiación cultural y el uso del espacio. Luego mostraremos las ventajas y problemas que surgen al utilizar una perspectiva de Arqueología Pública desde el inicio de un proyecto de investigación.



ペルー・ワロチリにおける「遺跡」利用の継承性

大平秀一（東海大学）

「遺跡」は、建設・使用された当時の文化的意味が忘却され、無機物化した物質であるが故に「遺跡」(sitios arqueológicos ; ruinas) と称される。考古学者は、基本的にはこの認識を前提とし、忘却された過去の社会・文化の理解・復元・再構築のために、遺跡の発掘調査／科学的破壊を行い、出土した物質文化の研究に関心を向ける。

アンデス地域は、「インカ神話」や"lo Andino" (アンデス的なもの／アンデス性) の観念等、文化の継承性をめぐる議論が積極的に展開されてきた地域である。その一方で、「遺跡」をめぐって、文化の継承性を探る調査・研究は、ほとんど実施されてこなかった。その背後には、「遺跡」認識と学問の細分化が少なからず影響している。

エクアドル南部高地において、インカを対象とした遺跡調査を実施してきた発表者は、インカ時代と同質的な意味の継承性を伴う「遺跡」利用を探るべく、2017年9月に、ペルー中央高地のワロチリ地域において民族誌的調査を実施した。その結果、水路の清掃儀礼、家畜の繁殖儀礼、病気治療、その他の祭祀・儀礼等において、遅くともインカ時代には建設・使用され始めたと判断される「遺跡」が、文化的意味を脈々と継承しながら利用され続けている多くの情報を得ることができた。

ワロチリ地域は、1598年頃あるいは1608年頃、サン・ダミアン教区を担当していたフランシスコ・デ・アビラ神父と先住民書記トマスにより、先住民の語る精神世界の一部がケチュア語で書き留められた、いわゆる「ワロチリ文書」の存在で知られている。本報告では、「ワロチリ文書」をはじめとする歴史文書の記述、「遺跡」の特徴・様態、現代における「遺跡」利用を比較・対照・検討し、「遺跡」の意味の継承性／文化の継承性を議論・検証したい。

テンプロ・マヨール遺跡（メキシコ市）における展示の実態と課題

—先スペイン期遺跡におけるノンパーソナル・インタープリテーション開発の可能性—

渡辺裕木（筑波大学大学院）

本研究は、メキシコ市中央部歴史地区に在るテンプロ・マヨール博物館内で公開されている遺跡を例に、先スペイン期遺跡が文化普及施設としてより効果的に機能する為に、来訪者に対する学術的知見発信の主要ツールである解説パネルによる、ノンパーソナル・インタープリテーションの有効性及び問題点を、博物館学的観点からの分析と、パネル利用者へのアンケート調査を通して把握、改善することを目的としている。

現在メキシコ国内では、遺跡管理における最高機関「国立人類学歴史学研究所（INAH）」の管轄下で、189件の先スペイン期遺跡が一般公開されている^(註)。遺跡において、専門的知識のない一般見学者が、遺構の外観を楽しむだけでなく、諸学問の研究成果である知見を理解する為には、ある程度の解説（インタープリテーション）が必要である。しかし、遺跡における展示技術の向上に関して「見学者が遺跡空間や遺構についての学術的知見を理解する上で適切か」といった観点から、学術的に把握・検証・検討されているとは言い難い。本研究では、現在メキシコ国内の多くの遺跡において、唯一の無料情報伝達媒体である解説パネルに着目し、パネルがより有効に機能する為には、パネルの発信する情報の内容と量が一般の利用者を考慮したものであること、パネルの形状や設置状況が、屋外である遺跡環境での利用に適していること、さらに、観光地のレジャーとしての楽しみを損なわないように情報を提供する工夫が為されていることといった諸条件が必要であると考え、テンプロ・マヨール遺跡を例に、現在使われているパネルの問題点と、有効性を高め得る改善点を把握したいと考えている。

本発表では、これまでの現地調査の成果を発表する。

^(註) メキシコ国立人類学歴史学研究所「遺跡網」 < <http://www.inah.gob.mx/images/zonas/lista/pagina.html> > 最終変更日 2017年8月23日、最終閲覧日 2017年9月21日

プロジェクト・マティグアスーコミュニティを主体とした
考古学調査と博物館活動の実践的地域研究ー

植村まどか（京都外国語大学大学院）

南博史（京都外国語大学）

サグラリオ・バジャダレス（ニカラグア国立自治大学）

レオナルド・レチャド（ニカラグア国立自治大学）

プロジェクト・マティグアスとは、ニカラグア共和国マタガルパ県マティグアス郡キラグア山系西麓一帯をフィールドとして、京都外国語大学国際文化資料館がニカラグア国立自治大学考古学機関（CADI, UNAN-Managua）とマタガルパ県で活動するNGO団体ANIDESと連携して行う、考古学と博物館学を仲介者とした実践的地域研究プロジェクトである。本プロジェクトの目的は以下である。

- 1) 地域一帯を博物館と見立てたフィールドミュージアムとして捉え、遺跡や遺物などから先住民文化を正しく理解し、地域課題解決に向けて新しい価値を発見すること
- 2) 博物館的方法を使って教育普及活動を行い、地域住民とともに地域活性化のための地域モデルをつくること

2013年から同地でフィールドワークを実施、2014年以降はキラグア山系西麓に位置する遺跡のひとつであるラス・ベガス遺跡での考古学調査に加え、同年よりティエラブランカ村のコミュニティを対象としたワークショップを行っている。

本パネルでは、2017年春期にラス・ベガス遺跡で実施した測量・発掘調査の成果と、同年夏期にコミュニティで実施したワークショップの経過を中心に報告する。約44,000㎡の広域測量により、以前確認された約40のマウンド群の他に、大基壇や広場と推測される痕跡が新しく確認された。さらにマウンド群の分布と遺跡の東側にそびえるキラグア山との位置関係から、遺跡周辺の自然景観を考慮した建築方位軸の統一性が見られ、古代メソアメリカ文明の影響を受けていた可能性も考えられる。一方、今回のワークショップでは、ティエラブランカ村の地域住民とキラグア山系西麓のコミュニティ代表者を招集し、同年春期調査の考古学的成果を報告したほか、各コミュニティ住民から構成される文化財ネットワークの構築を行った。またマティグアス市長がコミュニティミュージアム建設を宣言されたことを受け、今後は地域住民とともに博物館建設に向けた具体的なワークショップに取り組む予定である。

古典期ティカル、建造物グループの中庭における木造掘立建物の存在の可能性について
—2016年度調査による具体的な土器生産活動の場の推定—

今泉和也 (北海道大学大学院)

レオネル・シセ (マリアノ・ガルベス大学)

メソアメリカ地域では窯の検出例は多く、特に後古典期以降の時期に属する窯がメキシコのオアハカ谷やプエブラを中心に報告されている。一方でマヤ地域に限定した場合、窯の検出例は僅かである。特に、付随する十分な間接的証拠により明確に古典期に属すると考えられる窯は検出されておらず、当該時期の土器生産体制は明らかになっていない。

ティカル遺跡の事例ではベッカーによって、エリア 4H が土器生産区域として推定されている。彼は、原料としての粘土や燃料としてのヤシ科植物にアクセスし易い、バホ(季節的湿地帯)に対して半島状に突き出した台地という立地条件を根拠の一つに挙げている。本調査ではベッカーの推定区域の南方約 800m に位置する、同様の立地条件を有するエリア 6H を対象とした。

これまで先行研究では土器生産体制の理解のために、主に土器焼成址としての窯の発見を重要な課題としてきた。しかしながらこれまでに十分な間接的証拠を伴う窯の検出例はない。本プロジェクトでは土器生産址を「粘土採掘址」、「製作址」、「焼成址」に区分し、これらの 3 つの遺構のデータから当時の土器生産体制について具体的に明らかにすることを目的としている。

初年度の一つの成果は、測量調査と踏査により、旧測量図における各建造物グループを構成する建造物の形状と位置関係を修正した測量図を作成したことである。また初年度の最大の調査成果は「製作址」の発見である。発掘調査により、建造物グループ内の中庭において柱穴遺構を検出した。中庭にはかつて基壇のない木造掘立建物があり、ベッカーらの先行研究で指摘されてきた土器生産活動が具体的にこの木造掘立建物の下で行われた可能性があることを指摘する。

また 2017 年度に実施した調査によって、「粘土採掘址」、「焼成址」のそれぞれの遺構を検出している。これらのことにより先行研究の区域を含む、ティカル東部の広い区域が土器生産区域であったと推測しつつ、継続的に調査を実施している。

「メキシコ西部、ロス・アガベス遺跡における試掘調査ならびに踏査概報」

吉田晃章（東海大学）

ロドリゴ・エスパルサ（ミチョアカン大学）

フランシスコ・ロドリゲス（プレサ・デ・ラ・ルス調査団）

マリオ・レティス（ミチョアカン大学）

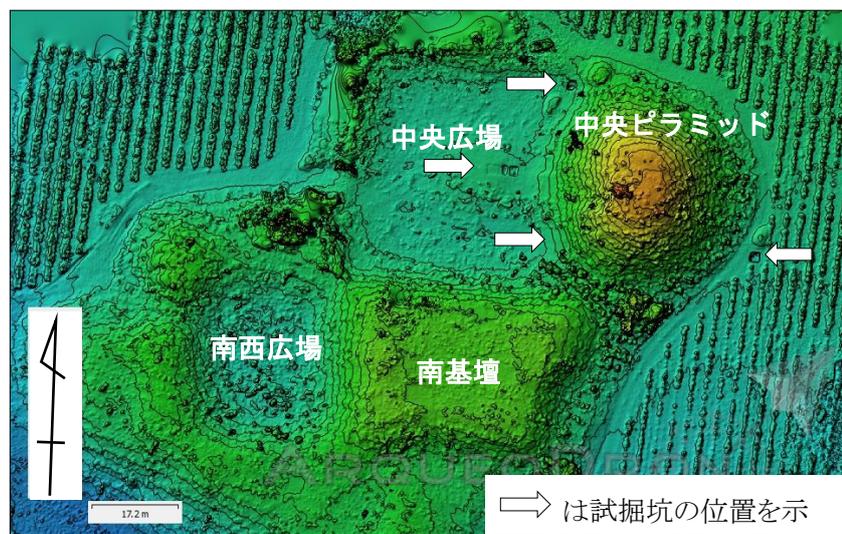
本発表では、2017年2月から3月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス地方における踏査と5月に行われたロス・アガベス遺跡の試掘調査について報告する。同遺跡は、中心部分が6haほどの小規模遺跡ではあるが、近傍には刻点十字紋を含む多数の岩絵が存在しており、この遺跡の祭祀センターとしての重要性が窺える。これまでの踏査と測量により、ピラミッド状基壇など複数の基壇によって構成される中央広場の中心には、わずかな隆起が確認されている。このため試掘では、広場中央における祭壇の有無と残存状況の確認、遺跡の年代同定、試験的な土器の相対編年の作成を目的とした。

5月の試掘調査では、中央広場の隆起が祭壇の痕跡なのかを確認するために、2×6mの発掘区を設けた。さらに広場北東端と南東端を確認するため試掘坑を設けた。また広場内部の堆積状況と外部の堆積状況を比較するため、中央ピラミッドの東側に試掘坑を設定した。

各地点で発掘を行ったところ、広場の中央からは祭壇の壁とそれに付随する土製の階段部を確認した。階段部直上からは炭化物や土器片が出土し、年代測定を依頼している。広場の角にあたる試掘坑では、残念ながら広場の端を捉えることはできず、予想以上に中央ピラミッドの瓦礫が広場に堆積していることが窺えた。一方想定された通り、広場内部は総じて出土遺物が少なかったが、中央ピラミッド東側の試掘坑からは、一定量の土器片が得られ、中には古典期後期に特徴的な土器片も確認された。

ロス・アガベス遺跡やルス湖周辺で継続している踏査からは、新たな刻点十字紋を含む、多数の岩絵が確認された。岩を擦り鉢上に加工した半球形の窪みも多数確認され、中には約20個もの窪みのある岩も確認された。

この岩絵群と祭祀センターにどのような関係があるのか、現在の調査状況に照らして報告したい。



ドローンによるロス・アガベス遺跡の簡易測量図

イロパング火山噴火前後のチャルチュアパ遺跡群

伊藤伸幸 (名古屋大学), 北村繁 (弘前学院大学)

イロパング火山噴火による関連する周辺地域の文化の衰退はステレオタイプの災害が語られてきた。本発表では、1960-70年代に先古典期文化の衰退とともに語られているイロパング火山噴火によるメソアメリカ南東部太平洋側文化の衰退を2000年以降に実施した考古学調査と火山灰編年学的研究から得た成果を発表する。

先古典期の終焉を紀元後250年と考えた従来のイロパング火山噴火は紀元後4~6世紀の間に落ち着くことが最近の放射性炭素年代測定研究の成果から指摘されている。これは、古典期前期に相当する年代であり、従来の先古典期文化の衰退と関連付けることはできなくなっている。また、チャルチュアパ遺跡群エル・トラピチェ地区の考古学調査では、イロパング火山灰層の上と下から検出された炭化物のAMS年代測定でも紀元後4~6世紀にイロパング火山灰降下があったことを示すデータがある。

一方、2000年以降に実施してきたチャルチュアパ遺跡群の調査では、地区ごとにイロパング火山灰層の上と下、つまり火山噴火の前後では異なる様相が観察されている。古典期前期に都市活動の中心であったタスマル地区と既に建造物の建設が停止していたカサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区ではイロパング火山灰堆積後の反応が異なっている。また、エル・トラピチェ地区とカサ・ブランカ地区のイロパング火山灰層の上に堆積する層を観察すると明らかな相違点がみられた。つまり、当時のチャルチュアパの中心と他の地区では火山噴火に対する反応が異なっていたと考えられる。建設活動を継続していたタスマル地区では火山灰を必要最小限度で取り除き建設活動を継続し、建設活動が停止していたカサ・ブランカ地区では火山灰は放置されていた。

本発表では、エル・トラピチェ地区などの発掘成果を示すとともに、その意味を分析し、当時のチャルチュアパに居た人々の火山噴火に対する反応を考察する。

パコパンパ遺跡における儀礼的廃棄
—饗宴儀礼共伴資料の分析を中心に—

荒田恵 (関西大学)

関雄二 (国立民族学博物館)

ファン・パブロ・ビジャヌエバ (サン・マルコス大学)

ディアナ・アレマン (サン・マルコス大学)

マウロ・オルドーニェス (サン・マルコス大学)

ダニエル・モラーレス (サン・マルコス大学)

近年、パコパンパ遺跡と同時期のチャビン・デ・ワントル遺跡やカンパナユック・ルミ遺跡などで儀礼的廃棄についての報告例が相次いでいる。この儀礼的廃棄は饗宴儀礼との関連が指摘されており、当遺跡でも同様の儀礼的廃棄が行われていたことが想定されるようになってきている。

パコパンパ遺跡では、2014年の発掘調査で、第三基壇上に位置する半地下式方形広場の北側基壇にある半地下式パティオ内で、形成期後期に対応する層位から大量の土器片が集中して出土し、その周辺の土が被熱していることが確認された。そして、これらの土器片に伴って大量の動物骨および石器や骨角器などが出土していることが分かった。

これまでに、このパティオから出土した土器および獣骨の分析で、パティオ内で饗宴儀礼が行われていたことが明らかになった。また、2012年までの発掘調査で出土した骨角器、土製品および金属製品の分析から、儀礼に際して幻覚剤を吸引するために用いられたと想定される骨角器も出土していること、さらに、金属を製錬するための坩堝や金属加工をするための銅製品がパティオから集中して出土する傾向が確認できたことから、チャビン・デ・ワントル遺跡およびカンパナユック・ルミ遺跡の事例と同様に、パコパンパ遺跡で饗宴儀礼が行われ、共伴する資料が意図的に廃棄された可能性が想定された。

そこで本発表では、どのような資料が饗宴儀礼に伴って廃棄されたかを特定することで、当遺跡で行われた儀礼的廃棄の特性を把握し、他遺跡における儀礼的廃棄の事例と比較を行う。

分析対象とするのは、饗宴儀礼に共伴する石製の遺物、骨製の遺物、土製品および金属製の遺物のほか、発掘調査成果の見直しにより、饗宴儀礼に対応することが確認された、2010年のパティオ東側の発掘調査で検出された3-A層より出土した資料である。

はじめに、それぞれの出土資料の構成比をまとめ、2005年から2012年までの発掘調査でパティオを除く第三基壇上から出土した、全資料の出土構成比と比較した。そして、これらの比較結果について統計学的有意差を検証した結果、石製品および玉製品の未製品のほか、玉製品の原材料であり銅製錬にも用いられた銅の二次鉱物、および金製錬や銅精錬などの金属製錬に用いられた坩堝が、饗宴儀礼に際して意図的に廃棄された可能性が示された。つまり、石製玉製品の製作および金属製錬という生産活動と饗宴儀礼の関連性が示唆された結果になり、3-A層から粗銅が出土している事実はその妥当性を裏付けている。

カンパナユック・ルミ遺跡のP2の儀礼的廃棄の事例では、黒曜石製の石器および骨角器の製作と関わる点で当遺跡の事例とは異なるが、生産活動と饗宴儀礼の関連性という点で共通点がみられる。この共通点に注目し、形成期後期に饗宴、生産そして廃棄という一

連の行為が儀礼的に行われ、儀礼行為に生産活動が組み込まれるようになった可能性について論じる。

マヤ文明の地域間・遠距離交換：グアテマラ、セイバル遺跡の黒曜石製石器の通時的研究
青山和夫（茨城大学）

古典期マヤ文明（後 200～950 年）の黒曜石製石器について多くの研究が積み重ねられてきたが、それに先立つ先古典期マヤ文明（前 1000～後 200 年）のデータは少ない。本研究発表は、セイバル遺跡から出土した全黒曜石製石器の通時的研究を通して、黒曜石の地域間・遠距離交換の通時的な変化という、マヤ文明の政治経済組織の一側面を実証的に明らかにする。

(1) セイバルの住民は、グアテマラ高地のエル・チャヤル、サン・マルティン・ヒロテペケ、イシュテペケ、メキシコ中央高地のパチューカ、サラゴサ、サクアルティパン、メキシコ西部高地のウカレオとシナペクアロという、少なくとも 8 つの産地から黒曜石を、複数の中継地点を介して間接的に搬入した。とりわけ、グアテマラ高地から地域間交換された黒曜石製石器が、全ての社会階層の日常の道具として使われた。

(2) セイバルの住民は、先古典期中期前半リアル 1 期（前 1000～前 850 年）に最初の公共祭祀建築と公共広場を創設すると共に、グアテマラ高地エル・チャヤル産黒曜石を自然石または自然面を残した大きな石片として搬入し、不定形な剥片を打撃剥離した。

(3) 先古典期中期前半リアル 3 期（前 775～前 700 年）に、エル・チャヤル産とサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製石刃核の地域間交換と石刃の生産が開始された。これは、黒曜石製石刃の生産に関する現在のところマヤ低地で最古の実証的な証拠である。

(4) 大部分の黒曜石は、先古典期中期前半（前 1000～前 700 年）にエル・チャヤルから搬入され、サン・マルティン・ヒロテペケ、イシュテペケが続いた。先古典期中期後半（前 700～前 350 年）にサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石が主流になり、エル・チャヤル産が減少し、少量のイシュテペケ産黒曜石も搬入された。グアテマラ高地とマヤ低地を結ぶ地域間交換網に大きな変化があったことがわかる。

(5) 先古典期中期前半のリアル 3 期から先古典期終末期にかけて時代が下るにつれて、大型の石刃核の搬入が増加した。黒曜石は先古典期を通して自然石または自然面を残した大きな石片としても搬入され、それぞれ石刃と剥片が製作された。

(6) 古典期前期（200～600 年）には、黒曜石の産地は先古典期中期前半と同様にエル・チャヤルが再び主流になり、イシュテペケが増え、サン・マルティン・ヒロテペケが激減した。グアテマラ高地とマヤ低地を結ぶ地域間交換網に再び大きな変化があったことがわかる。大部分の黒曜石は古典期を通してエル・チャヤルから搬入され、黒曜石は石刃を押圧剥離するために既に整形された、より小さな石刃核として搬入された。

(7) 少量のメキシコ高地産黒曜石が、古典期に石刃あるいは両面調整尖頭器の完成品として入手され、支配層が権威を示す威信財として社会・象徴的に重要であった。



先古典期中期後半のセイバル遺跡の黒曜石製石器（青山和夫撮影）